

京都大学

生態学研究センター・ニュース No. 38

京都大学生態学研究センター
センター長 和田英太郎

Center for Ecological Research
Kyoto University

目次

- 京都大学環境フォーラムの発足について 井上民二
 - サラワク通信 永光輝義
 - 自己評価点検委員会
 - 公募研究会のお知らせ
 - Information
 - 編集後記
 - 今後のスケジュール
-

京都大学環境フォーラムの発足について

井上民二(京都大学生態学研究センター)

設立の趣旨と経過

『最近数十年における人口の急増とエネルギーなどの大量消費によって、地球の生命維持装置としての地球圏 - 生物圏が崩壊の危機に瀕している。生物多様性減少や温室効果ガス濃度上昇、オゾン層破壊、酸性雨、土壌流出など、我々が直面する地球環境問題の解決なしには21世紀における人類の生存そのものが危ぶまれている。

こうした地球環境問題に対処するためには、地球圏 - 生物圏における生命維持機構を解明し、それにたいする人類活動の影響を、社会経済システムのありかたを含めて、再検討する必要がある。これは快適な都市空間のうえに成立してきた近代文明のありかたをも問う作業でもあり、従来の科学の枠組みをこえたものにならざるをえない。人文科学、社会科学、自然科学の総合化が求められる所以である。

京都大学は地球環境問題に対処できる研究者や研究機関を数多く擁しており、それぞれの分野で優れた研究実績をあげてきた。「京都大学環境フォーラム」は人文科学、社会科学、自然科学における学内関連分野の研究者ならびに研究機関のネットワークを作ることによって、地球環境問題にたいする診断や治療のヴィジョンを総合的に研究する体制作りのために設立された。また、これは、昨年10月に地球環境保全関係閣僚会議で決定された「生物多様性国家戦略」や昨年4月に提出された文部省の地球環境科学推進のための建議などにたいし、京都大学として積極的に取り組むことを意図している。

今回、本格的な活動を開始するにあたって、問題の所在を明確にし、今後の取り組みのマクロな方向を議論するために発足記念シンポジウムを企画した。本シンポジウムはこの分野の研究に直接携わっている研究者はもちろんのこと、この分野の次世代をになう学生にもぜひ参加いただきたい。また、学外の方々の参加も歓迎する。』

以上紹介したのが京都大学環境フォーラム発足記念シンポジウム「地球環境問題と人類の行方」の趣旨説明である。これが簡潔であるがもっとも京都大学環境フォーラムの趣旨を適切に表現していると思われる。

京都大学環境フォーラムは以上の趣旨のもと、1995 年秋から設立の準備作業に入り、1996 年 4 月に正式に発足した。設立に際してその趣旨に賛同し発起人に参加したのは 51 名であった。発起人は全部で 20 部局（学部、研究科 11、研究所、研究センターなど 9）と地球環境問題に関連するほとんどの部局から参加があった。この点からも全学をあげての取り組みといえる。発起人の代表を古澤巖農学部長がつとめた。

5 月にはいって発起人があつまり、今後の運営をスムーズに進めるために協議委員会を設置し、委員長には発起人代表であった古澤巖農学部長が就任した。また、委員長を補佐するため、福井勝義（総合人間学部教授、国際文化学科）、和田英太郎（京大大学生態学研究センター長）、内藤正明（工学研究科教授、環境地球工学）、植田和弘（経済学部教授）、武部啓（医学研究科教授）が副委員長として選任された。事務局は京大大学生態学研究センター（安部琢哉）に置くことにした。

発足記念シンポジウムの開催

京都大学環境フォーラムの発足を記念するシンポジウムが 1996 年 4 月 17 日午後 1 時から 5 時に京都大学の時計台がある建物内の法経第 1 教室で「地球環境問題と人類の行方」というタイトルのもとでおこなわれた。

シンポジウムは井村裕夫総長のあいさつからはじまり、3 名の基調講演、それをうけたパネルディスカッションという構成であった。

基調講演は石弘之（東京大学大学院総合文化研究科教授）による「迫り来る破局をどう乗り越えるか」、川那部浩哉（琵琶湖博物館長、前京大大学生態学研究センター長）による「科学にとって地球環境問題とは何か」、梅原猛（国際日本文化研究センター顧問）による「環境破壊と文明の歴史」であった。パネルディスカッションにはこれら 3 名に古澤巖（京都大学農学部長）、佐和隆光（京都大学経済研究所長）、福井勝義（京都大学総合人間学部教授）、東正彦（京大大学生態学研究センター教授）の 4 名が参加し、井上民二（京大大学生態学研究センター教授）がコーディネーターをつとめた。

会場の法経第 1 教室は京都大学でもっとも大きい講義室で定員が 628 名である。参加人数は配付資料から約 600 名と、ほぼぎっしりと会場がうまる状態になった。また、アンケート解答者 362 名、質問票提出者 101 名と、参加者の大半が地球環境問題にきわめてたかい関心をもっていることが判明した。コーディネーターとしてこれらの質問を議論に組み込むのにうれしい悲鳴をあげた。とくに学部学生や大学院学生の真摯な質問が多かった。大学の社会的使命について全学をあげたこうした議論が京都大学でおこなわれたのは本当に久々のことらしい。法経第 1 教室を会場に選んだとき、最近 10 年間でここをいっぱいにしたのは予備校の先生と新興宗教の教祖だけであると、こうしたことにくわしいわたしの友人にからかわれた。

このシンポジウムには学外からの参加も多かった。地球環境関西フォーラムが共催として参加し、関西一円の自治体や企業に参加をよびかけてくれたためとおもわれる。いうまでもなく、地球環境問題は大学だけの閉じたアプローチでは対処できない大きな問題である。大学は本来市民社会に開かれたものであるのは当然のことである。京都大学環境フォーラムもこうした市民、自治体、民間企業との議論の場として今後とも活用していきたい。

このシンポジウムに関してはマスコミでも大きくとりあげられた。そのうちから中日新聞と毎日新聞を以下で紹介する。そのほうが社会がどのように地球環境問題をみているかがよくわかると判断したからだ。また、このシンポジウムの詳細な記録は 10 月 15 日発売の「創造の世界」(小学館)第 100 号の特集としてとりあげられることになった。

今後の活動について

生態学研究センターも 10 年時限の前半分をおえ、6 年目にさしかかった。今後京都大学全体として地球環境問題にどのように取り組んでいくかは、IGBP に取り組むために設立された生態学研究センターにとっても関連が深い。しかし、地球環境問題のスペクトルの広さからみると、生態学が直接対応できる守備範囲ですべてをカバーできないのも事実である。上記の発足記念シンポジウムでも、地球環境問題にまともに対処する学問体系の再編をいかにおこなうかが最重要課題と指摘する声が多かった。

京都大学には 20 以上の地球環境問題に関連する研究活動をおこなっている部局がある。これらの研究活動をいかに有機的にむすびつけるかが上記の目的には不可欠である。そこでこのフォーラムでは定期的にセミナーをもち、各方面でどのような活動をおこなっているかについての相互理解を深めることになった。実は発足記念シンポジウム以前に第 1 回のセミナーを京大会館で 2 月 29 日にもった。スピーカーは松本紘(京都大学超高層電波研究センター)「地球環境問題と宇宙開拓」と井上民二(京都大学生態学研究センター)「地球環境問題としての生物多様性」であった。松本紘はエネルギー問題は宇宙発電によって解決可能であるという宇宙開拓論を紹介した。わたしの方は、ここ数年生態学研究センターが積極的に取り組んでいる生物多様性問題の国内外の現状を報告した。約 40 名の参加があった。

秋からこのセミナーを再開する予定である。予定がきまり次第本センターニュースでも順次紹介していきたい。



マレーシア、ランビル国立公園の低地フタバガキ林。今年4年ぶりに低地フタバガキ林の一斉開花が始まった。写真：永光輝義

地球環境問題の解決は、人間の中心でなく、自然の中心で考える必要がある。この問題について、同大学の入念な調査結果が、同誌に発表された。同誌は、同大学の調査結果を、同誌の読者に紹介している。同誌は、同大学の調査結果を、同誌の読者に紹介している。同誌は、同大学の調査結果を、同誌の読者に紹介している。

解決の知恵は

地球環境問題

温暖化 酸性雨...



サイエンス & ホイヤー
地球環境問題の解決は、人間の中心でなく、自然の中心で考える必要がある。この問題について、同大学の調査結果が、同誌に発表された。同誌は、同大学の調査結果を、同誌の読者に紹介している。

人間中心でない新しい関係の構築
地球環境問題の解決は、人間の中心でなく、自然の中心で考える必要がある。この問題について、同大学の調査結果が、同誌に発表された。同誌は、同大学の調査結果を、同誌の読者に紹介している。

京大がフォーラム開設

学部の枠超え自由に意見

京大がフォーラム開設
学部の枠超え自由に意見
地球環境問題の解決は、人間の中心でなく、自然の中心で考える必要がある。この問題について、同大学の調査結果が、同誌に発表された。同誌は、同大学の調査結果を、同誌の読者に紹介している。

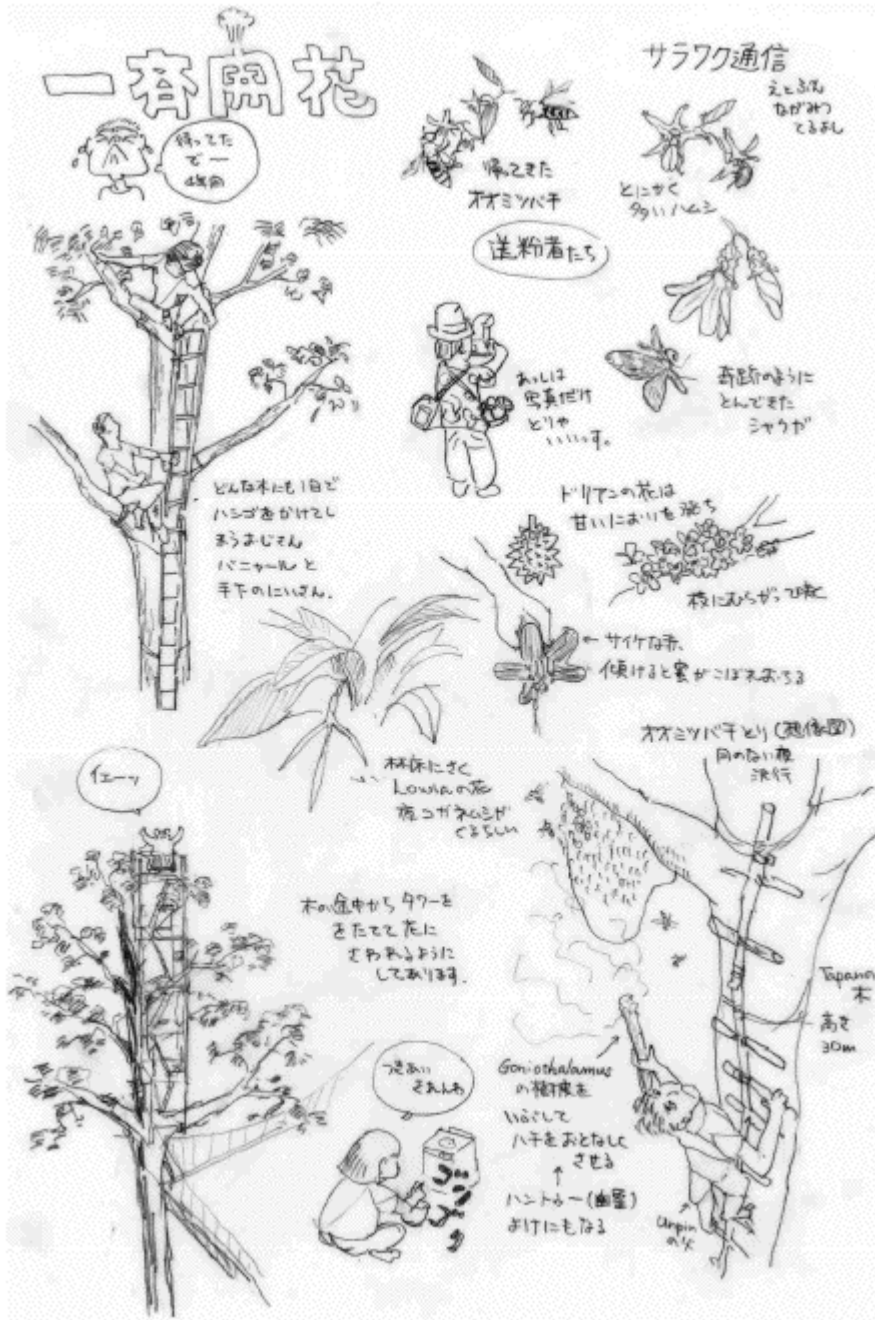
サラワク通信

フタバガキ一斉開花

永光輝義(京大大学生態学研究センター)

マレーシア、サラワク州のランビル国立公園では、今年4年ぶりに低地フタバガキ林の一斉開花が始まった。開花は3月から始まり、ウルシ科、ムクロジ科の樹木が咲いたあと、樹高70mにたつするフタバガキ科の樹種がつぎつぎに開花した。一斉開花といっても「全山満開」のようには見えない。夜咲く花、葉に隠れるように咲く花が多いためだ。しかし森は、多様な送粉動物を誘うさまざまな花の香に包まれる。一斉開花のトリガーは2月の乾燥と低温だったといわれている。一斉開花を予知して豚は発情し、オオミツバチは森に帰ってきた。数年にいちどの「森の祭り」は森に暮らす生きものに

とってどのような意味があるのだろうか。



第1回「自己点検評価委員会」の報告

当センターは設立以来、時限までの半ばにあたる5年間で既に経過し、この時点で現在までの成果を振り返り、問題点を抽出するとともに、後期5年間の進路を定めるべく、外部からの評価委員を委嘱し、自己点検を行うこととなった。委嘱した委員の方のお名前は下記の通りである。

専門的評価委員

伊藤嘉昭、巖佐庸、岩熊敏夫、甲山隆司、半田暢彦

社会的評価委員

甲山隆司、大島康行、橘川次郎、近藤次郎、中村桂子、石井吉典

第1回評価委員会は下記により開催された。

日時：1996年7月23日 13時より17時

場所：生態学研究センター

出席者：巖佐庸、岩熊敏夫両委員 和田英太郎（センター長）菊沢喜八郎（センター自己評価担当）

内容：担当より、センターの設立経過、歴史、国際シンポジウム、セミナー等センターの活動、教官の研究業績、卒業生就職先、修士・博士論文等教育活動等について説明の後、討議、貴重な意見を頂いた。特に、センターは他大学の生態学講座の単に規模の大きいものにとらえるべきではなく、日本全体のセンターであるとの観点から様々な問題を検討する必要があるとの意見が出された。この観点から例えば、大学院生、ポスドク等を採用するに当たっても、京都大学出身者に偏らず、全国から採用するシステムを採るべきである。研究面では、センター教官は業績のある人を採用していて、業績面で見劣りしないようだが、センターに赴任してからの業績はどうかという厳しい疑問がだされた。最大の問題は研究支援システム特に正式の事務職員が手薄であり、その用務が教官にかかっていることである。支援システムを充実させるとともにポスドクのポストを増やし、若手による研究を充実させることが必要であろう。なお第2回は9月に行われる予定であり、最終報告書は年内の完成を目指している。

文責 センター自己評価担当 菊沢喜八郎

     **公募研究会のお知らせ**      

ブナの繁殖・更新過程の地理変異に関するネットワーク研究

代表者 中静 透(京大大学生態学研究センター)

近年、ブナ個体群の更新・繁殖に関して複数の調査地間での研究協力が進むようになり、個別の地域で観察される更新や生残のパターンが全国レベルのブナ林の背腹性の中でどの様に位置づけられるのか、また、あるのかといった問いに対して現実的なアプローチが可能になってきました。本研究会ではブナ林の研究者ネットワークのひとつである Nutwork グループが93年以降行ってきた研究を主な事例として、ブナ林のネットワーク研究の現状および可能性と展望について議論します。ネットワーク研究を現在行っておられる方、また、上記の主旨に関係する議論に興味のある方の参加を希望します。

開催日時：1996年9月13日（金）14：00 開始、14日（土）14：00 散会

開催場所：玉原朝日の森（群馬県沼田市、JR上越新幹線上毛高原・上越線沼田駅より送迎）

話題提供：

- | | |
|------------------------------|--------------------|
| 1. 樹木はなぜ種子生産を大きく変動させるのか | 田中 浩（森林総研） |
| 2. もう一つのブナ、イヌブナの更新とマस्टینگ | 大久保 達弘（宇都宮大・農） |
| 3. ブナの更新の背腹性とネズミの動態との相互作用 | 入江 潔（新潟大・農） |
| 4. 1993/94の全国17カ所におけるブナの実生更新 | 本間 航介（京大生態研） |
| 5. ブナ林の背腹性は遺伝レベルの地理変異と対応するか | 本間 航介・渡辺 幹男（愛知教育大） |

参加定員：30名先着（事前の申し込みと10000円程度の宿泊費が必要です）

参加希望者は9月7日（金）までに以下の場所にお名前・所属・連絡先などを記入したファックスないしE-mailをお送り下さい。折り返し、講演要旨・会場までの交通などを記したプログラムを送付いたします。

事務局：本間 航介・中静 透
京都大学生態学研究センター京都分室
FAX 075-753-4253
E-mail homma@ecology.kyoto-u.ac.jp (本間 航介)

水辺の生物群集：人為の影響と生息場所の保全

代表者 江崎保男(姫路工業大学自然・環境科学研究所)

日時：1996年9月20日午後から22日午後まで(泊まり込み)
会場：兵庫県立人と自然の博物館(20・21日)および神戸大学滝川記念学术交流会館(22日)

河川や水田に代表される身近な水辺は、人の営みと深い関わりをもちながら多様な生物を養い、日本の四季をかたちづくってきた。しかし、ここ数十年間の水辺環境の大きな様変わりには、過去に普通に見られた生物たちのかなりの部分が絶滅の危機に立たされているという未曾有の事態をもたらしている。

この現実直面して、野外生態学者が果たすべき役割の大きなもののひとつは、身近な水辺に生息する生物群集とその生息基盤を明らかにし、環境保全・復元の一指針を示すことである。

本研究集会の目的は河川・水田・ため池およびこれらのあいだに張り巡らされた水路網といった身近な水辺について、多様な生物群集が過去に生息できた理由あるいは近年の環境変化にともなって生物群集がうけた大きな打撃の実態とこれに関わる要因を、各種生物の占める生息場所(ハビタート、すみ場所)の分布・構造と生成・消滅に焦点をあてて明らかにすることである。日本の水辺環境は、遠い過去から治水や農耕等の利水など、人為的な操作の影響を強く受けてきており、生物群集もその影響下にある。したがって、近年の生物群集の変化も、河川改修や圃場整備から川の掃除や草刈りまで、さまざまなレベルでの人為の関わり方の変化の産物とおおむねみなすことができると予想できる。

演者と演題
9月20日

- 谷田一三(大阪府立大学) 河川の底生生物(水生昆虫)群集
- 遊磨正秀(京都大学) 農業水路と河川のホタル
- 田中哲夫(姫路工業大学) 河川の魚類群集
- 江崎保男(姫路工業大学) 水辺の鳥類群集

9月21日

- 角野康郎(神戸大学) ため池の植物群落
- 日鷹一雅(愛媛大学) 水田の栽培環境と生物群集
- 上田哲行(石川県農短大) ため池、水田のトンボ群集
- 日比伸子(檀原市昆虫館) ため池、水田の昆虫群集
- 近藤高貴(大阪教育大学) 農業水路の淡水貝類群集
- 長谷川雅美(千葉中央博) 水田、水路の両生・は虫類群集
- 藤岡正博(農水省・農研セ) 圃場整備のサギ類への影響

9月22日

- 日鷹一雅(愛媛大学) 生物多様性を活かせる水稻栽培は可能か

- 角野康郎（神戸大学）ため池の水草群落－共存から受難の時代へ
- 谷田一三（大阪府立大学）川虫と棲み場所の多様性河川学
- 田中哲夫（姫路工業大学）川の魚の生息場所

問い合わせ先：

江崎保男・田中哲夫

669-13 兵庫県三田市弥生が丘6丁目

人と自然博内 姫工大自然環境研

TEL:0795-59-2021 FAX:0795-59-2015

Tetsuo Tanaka

Postal address: Yayoi-ga-oka 6, Sanda, Hyogo 669-13, Japan

Tel: +81-(0)795-59-2021

Fax: +81-(0)795-59-2015

E-mail: f-tanaka@nat.himeji-tech.ac.jp

地図の上で群集を考える - 群集と景観の繋がりとその広がり

代表者 佐久間大輔(大阪市立自然史博物館)

概要

生態学と緑地計画論の接点を考える若手の勉強会です。取り扱う空間スケールの上でも、地域の自然を保全する使命を持つ（或いは保全に寄与する可能性を持つ）という意味でも共通点を持つ生態学と緑地学の研究者は、現在以上に接点を広げ対話の場を持つが必要だと私たちは考えます。今回は、生態学の研究者が考えている生息場所の結びつきや群集の空間構造を、緑地計画論を意識して表現する方法を考えます。「地域の自然をどう考えたらよいのか、その保護のために生態学は何を提供できるのか、計画論と生態学の情報共有はどうすれば可能なのか」を主題に、今回は群集の空間的な構造・広がり の記述方法と解釈方法に議論を集中させたいと思います。平たくいえば、緑地計画論の地域の捉え方から生態学研究者が景観生態学的な解析手法を導入することが大きな目的の一つです。また生態学が持っている（または持ち得る）情報を還元する道をつけていくことがもう一方にあります。おおむね、検討の対象としている環境は丘陵地とその周辺です。生態学・緑地学の若手研究者、またコンサルタント・行政などで現場を担当している方の参加をお待ちしております。

開催期日 1996年10月11日（金）～13日（日）

場所：交渉中（大阪周辺）

定員25名程度、合宿形式で行いますので全日程参加できる方を優先にします。

参加希望者は個別に佐久間まで郵送またはFAX, e-mailで連絡してください。

連絡先：

佐久間大輔（大阪市立自然史博物館気付）

〒546 大阪市東住吉区長居公園1-23

FAX:06-697-6225 e-mail: PXB07040@niftyserve.or.jp

プログラムの概要

10日午後

- 経過と趣旨説明 佐久間大輔（大阪市立自然史博物館）

Session 0

- イメージ造りのための事例報告 - - 個々の生物たちの生活史 演者未定

Session 1

- 計画論は地図の上にどう線を引くか？ - - 広域のゾーニングから水路レベルまで 篠沢健太（大阪芸大）、伊藤保（三菱総研）、三橋弘宗（京大生態学研究センター）

11日

Session 2

- 群集の空間構造は地図に書けるか？ 岩崎敬二（奈良大学）、野崎健太郎（京大生態学研究センター）、石井正人（広島大学）

Session 3

- GISは何ができるか？ - - 解析ツールとして・設計支援ツールとして - - 深町加津江（森林総研・関西）、池口仁（兵庫県・人と自然の博物館）

Session 4

- 生態学と計画論の接点を求めて - - まとめその1 - 佐久間大輔（大阪市立自然史博物館）、高橋俊守（埼玉県生態系保護協会）

12日

Session 5

- 地域の自然をどう守るか？
- 既存の生物情報・事例をどう活用するか？
- 今後何が必要か？

information

【北海道大学教授公募のお知らせ】

北海道大学大学院地球環境科学研究科・生態環境科学専攻では、下記の公募が行なわれています。お問い合わせ西則雄委員長か、または東正剛 (Tel: 011-706-2250; Email: hisemato@eesbio.hokudai.ac.jp) をお願いします。

1. 公募人数： 教授 1 名（環境情報医学講座）
2. 研究内容： 環境汚染物質が生態系を通じて生物に及ぼす影響に関心をもって研究していただける人。地球環境科学関連のプロジェクト研究に豊かな経験をもち、自らも中心となって計画・推進できる人が望ましい。
3. 着任時期： 平成 9 年 4 月 1 日
4. 提出書類：

1. 履歴書
2. 業績リスト（原著論文、著書、その他、に分けて列挙すること）
3. 主要原著論文 10 編の別刷またはコピー
4. これまでの研究の概要（地球環境科学との関連を含めて 2,000 字程度）

5. 今後の研究、教育に関する抱負（2,000字程度）

5. 公募締切：平成8年9月17日（火）必着

6. 書類提出先：

〒060 札幌市北区北10条西5丁目

北海道大学大学院地球環境科学研究科

生態環境科学専攻

環境情報医学講座教授選考委員会委員長

西 則雄（Tel 011-706-2256 Fax 011-726-5142）

（注）封筒の表に「教官応募書類」と朱書き書留にて郵送のこと。

7. 講座構成員：教授：東正剛 助教授：井上勝一、新岡正 助手：蔵崎正明

現在、修士課程24名、博士課程20名、研究生4名、計48名の学生が在籍。

【第19回極域生物シンポジウムの開催について】

日時：平成8年12月5日（木）・6日（金）

場所：国立極地研究所 講堂

〒173 板橋区加賀1-9-10

JR埼京線「板橋」駅より徒歩15分、または都営地下鉄三田線「板橋区役所前」駅より徒歩10分（東板橋体育館隣）

主催：国立極地研究所

概要：国立極地研究所では南極及び北極や北方域で得られた研究成果について、発表、討論を行うことを目的として毎年シンポジウムを開催しています。第19回シンポジウムでは、「南太平洋の生態過程」および「極域の湖沼生物」をテーマとして講演を計画しています。また、主要テーマに直接関連しない極域の海洋生物学および陸上生物学に関する研究発表も歓迎致します。

詳細は下記にお問い合わせください。

〒173 板橋区加賀1-9-10 国立極地研究所

生物シンポジウム事務局

TEL. 03-3962-4569（事務局直通）

FAX. 03-3962-5743

インターネット iida@nipr.ac.jp

コンピーナー：福地光男（TEL. 03-3962-6031）

伊村 智（03-3962-4569）

【九州大学理学部附属天草臨海実験所担当教授公募のお知らせ】

1. 公募人員 教授 1名
2. 選考分野 海洋生物学およびその関連分野
3. 提出書類

1. 履歴書。

2. 研究業績目録（主要論文7編以内に○印をつけ、その別刷各1部を添えて下さい）。

3. 現在までの研究の内容と将来の展望、九州大学に着任した場合の教育と研究にたいする抱負（総説などありましたら添えてください）。

4. 推薦書（自薦の場合には必要ありません）。

4. 締切期日 平成8年10月31日（木）

5. 問い合わせ先・書類送付先

〒812-81 福岡市東区箱崎 6-10-1

九州大学理学部生物学教室 巖佐 庸

TEL : 092-642-2639

FAX : 092-642-2645

電子メール : yiwasscb@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

天草臨海実験所教授公募書類在中と朱記し、書留にて送付のこと。

6. その他

- 臨海実験所は熊本県天草郡苓北町（天草下島北西岸）にあり、就任後は勤務地に定住していただきます。
- 臨海実習を担当するほか、学部生や大学院生への講義「海洋生物学」および大学院生（修士・博士課程）の指導の任に当たっていただきます。
- 実験所の教官構成は教授1名、助教授1名、助手1名で、現在は教授（所長）菊池泰二、助教授野島哲、助手森敬介で、いずれも海岸浅海のベントスの生態を研究しています。菊池教授は平成9年3月末に退官予定。
- なお、理学研究科生物学専攻に海洋生物学コース（修士・博士課程）が認められており、毎年大学院生数名が実験所に常駐して研究に従事しています。

編集後記

・また暑い夏が来て、センターの電気の取り合いが始まっています。センター員は国際セミナーやフィールドへとくりだして電気をめぐる競争は多少まし（！？）

・皆様のご意見・記事をお待ちしています。

・センター公募研究会も多数開催される予定です。皆様の参加をお待ちしています。

（杉本敦子）

今後のスケジュール

センターの行事および委員会

- 10月20日 センター・ニュース No. 39
- 12月20日 センター・ニュース No. 40

センターあるいはIGBP、DIVERSITAS、京大環境フォーラム関連の研究会

- 8月7日～26日 2nd. Internat. Field Biology Course in Western Pacific Asia (Lake Baikal)
- 9月5日～19日 4th International Seminar and Workshop on Tropical Ecology (Palawan, Phillippines)
- 9月13日～14日 ブナの繁殖・更新過程の地理変異に関するネットワーク研究（公募研究会）
- 9月20～22日 水辺の生物群集：人為の影響と生息場所の保全（公募研究会）
- 10月11～13日 地図の上で群集を考える - 群集と景観の繋がりとその広がり（公募研究会）
- 12月（予定）水循環と生物のかかわり - 水の安定同位体比を用いた研究の可能性をさぐる - （公募研究会）

関連分野の研究会・シンポジウム

- 8月18～23日 Int. Congr. of Bacteriology. and Mycology (Jerusalem, Israel)
 - 8月19～23日 Ecological Summer Summit 1996(Copenhagen, Denmark)
 - 8月25～31日 Int. Congr. of Entomology (Florence, Italy)
 - 9月2～6日 World Heritage Tropical Forests (Cairns, Australia)
 - 9月8～12日 River Restoration Conf. (Silkeborg, Denmark)
 - 9月8～12日 Ann. Meet. of Zoological Society of Japan (Sapporo)
 - 9月16～20日 ECSA 26 and ERF Symp. "Transport, Retention, Transformation Processes and their Biological Control in Estuarine and Coastal Systems" (Middelburg, Netherland)
 - 9月24～27日 第61回日本陸水学会札幌大会(札幌)
 - 10月1～4日 Int. Congr. of Behavioural Ecology (Camberra, Austraria)
 - 10月13～23日 World Conservation Congr. (Montreal, Canada)
 - 10月28～29日 Int. Symp. on Assessment and Status of Pacific Rim Salmonid Stocks (Sapporo)
 - 11月13～15日 Int. Symp. "Role of Forage Fishes in Marine Ecosystems" (Anchorage, USA)
 - 11月25～27日 海洋環境変動と生物資源変動に関するシンポジウム (Cape Town, South Africa)
 - 11月25～29日 FORTROP'96 International Conference on Tropical Forestry in the 21th Century (Bangkok)
-